活動報告

松原公民館講座「時代を切り拓いた女性たち～女性芸能者の歴史と歩み」

追手門学院大学上方文化笑学センター長・文学部　広瀬　依子

大阪府松原市の松原公民館から依頼をいただき、2022 年 10 月から 12 月にかけて全 4 回の市民向け講座「時代を切り拓いた女性たち～女性芸能者の歴史と歩み」を担当させていただいた。大きな軸を女性芸能者にしたのは、公民館の企画に合致していたためである。松原市の公民館では毎年、男女共同参画のテーマでさまざまな講座を開催されているとのことで、その一環としてお声をかけていただいたというわけである。

過去に行われた講座には「生地から作る『簡単スパゲッティ＆ピザ』」「はじめての心理学講座～自分の心の仕組みを知る」「美術館に行きたくなる～大人のための絵画鑑賞講座」「古事記・万葉集の時代の女性たち」「ニュースを読む時間」「名著の読み方～男女共同参画視点の『my 本棚』」など、幅広い分野が並んでいる。広く市民に開放された講座ということが一目瞭然だ。

今回、メインタイトルを「時代を切り拓いた女性たち」にしたのは理由がある。芸能は、趣味・嗜好のものと捉えられがちだ。しかし、世界中のほとんどの地域で、ほとんどの民族で、歌や踊りが行われている。ということは、芸能は決して好きな人だけが好きな場所で行い、鑑賞しているのではない。人間の生活から生まれた、本能に近い行動なのだと考えられる。当然のことながら、芸能者は生活者でもある。従って、芸能および芸能者の誕生と発展は、社会状況と相互に関連し合っているのだ。そして女性芸能者の変遷をたどると、いくつかの時代を切り拓いてきたことが見てとれるのである。

受講してくださった方々は 20 名弱で、女性が約 9 割、男性が約 1 割であった。私よりも先輩の方々が多かったが、皆さん熱心にノートをとられ、こちらの話を一言も聞き漏らすまいという熱意が伝わってくる。また、終了後にはさまざまな感想や意見、質問を書いた用紙を提出してくださるのが毎回楽しみであった。

毎回の講座テーマと概要は次の通りである。

☆第 1 回・女性芸能者の歴史と展開

女性芸能者は古代・中世にかけて活躍した。巫女や、男装して舞う白拍子女（しらびょうしめ）等が、その例である。源義経の恋人・静御前も白拍子女だ。だが、近世になってプロの女性芸能者が江戸幕府から禁止され、公には活動できなくなる。女性芸能者の活動は縮小されていった。復活したのは明治維新後の近代である。女性芸能者が公許され、娘義太夫や筑前琵琶が台頭する。新しい時代が到来し、社会のシステムが変わった時代である。長い間陰に隠れていた女性芸能者たちが、少しずつ表舞台に出てくるのは必然であった。

☆第 2 回・花街（かがい）の女性による舞踊と音楽

芸妓・芸者・舞妓等を擁するまちを花街と呼ぶ。「芸」妓・「芸」者・「舞」妓という名称からもわかるように、花街の女性たちは芸や作法を修得しなければならない。お座敷での接待が全てではないのだ。芸妓・芸者・舞妓になるためには、花街が設けた研修所や学校へ通ったり、先輩や師匠から稽古をつけてもらうことが必須である。現在では「都をどり」「京をどり」のように、広く一般観客の前で行う公演も実施されている。そのきっかけは明治 5 年、国内初の博覧会が京都で開かれた際に、京都の花街・祇園甲部の芸舞妓たちが舞踊を披露したことにさかのぼる。京都も

花街も古いと思われがちだが、このように先駆的なことを行っていたのだ。

☆第3回・女優の誕生

江戸時代、プロの女性芸能者は幕府から禁止されていたが、「お狂言師」と呼ばれる人たちが舞台活動をしていた。大名屋敷の女性たちに向けて芝居を演じたり、舞踊の師匠として活動した人たちである。そして明治維新後、壮士芝居と呼ばれる新しい演劇が生まれた。自由民権運動に関わる青年たちが政治的な主張を芝居に込めたのである。そこで成功をおさめた川上音二郎は海外公演にも出かけ、明治32年、アメリカ公演時に妻の川上貞奴を舞台に立たせた。日本の女優第1号である。それから約10年を経て、別の女優も活躍し始める。研究所であり劇団でもある「文芸協会」の一員だった松井須磨子である。『ハムレット』『人形の家』などの翻訳劇でスターになり、日本の新劇女優第1号と言われる。須磨子が活躍し始めた時代は、婦人解放運動が始まったのと同時代である。平塚らいてうによる雑誌『青鞜』には須磨子出演の舞台も取り上げられた。女性が社会に進出する兆しが見えてきたのである。

☆第4回・少女歌劇からレビューへ

独身の女性だけで歌・ダンス・芝居を繰り広げる舞台芸能が、歌劇＝レビューである。大正初期に創設された宝塚歌劇団は、今も国内外でよく知られている。現在の阪急電鉄の前身・箕面有馬電気軌道の役員・小林一三の発案による、乗客誘致策が始まりだ。その一環であるテーマパーク「宝塚新温泉」のアトラクションとして、宝塚歌劇（当時は宝塚少女歌劇）が誕生したのである。可憐でありながら華麗な少女たちの芸は人気を得て、やがて関西一円だけではなく全国各地に少女歌劇が誕生。戦前には約30団体を数えた。やがて表現も洗練され、「少女」の表記がなくなった今も宝塚は根強い人気を集めている。大正末期に大阪で生まれたOSK日本歌劇団も、経営母体の変遷を経ながら今も活動を続けている。宝塚が第1回公演を行った大正3年は第一次世界大戦開戦の年である。日本はこの大戦に参加したが国内は戦地にならず、むしろ好景気に沸いた。人びとの生活も都市型へと変化し、新たな娯楽を求める風潮に少女歌劇はぴったりであった。

このように概略を見ただけでも、社会の変化と芸能の変遷には相関性があることがわかる。また、古代・中世に始まり大正期に至るまで、上方＝関西では多くの芸能文化が生まれ、根付き、発展してきたことも見えてくる。関西の地に拠点を置く大学のセンターとして、笑いに加えて文化全般も視野に入れた活動を今後も続けていきたい。